

「本当の私」について

目次

はじめに

1. 筆者による11月24日のレポート
2. 筆者とJさんとの対話
3. 考察
 3. 1 「批判」について
 3. 2 「本当の私」について
 3. 3 日本語教育における「私」
 3. 4 筆者の目指す「私」

おわりに

はじめに

最終レポートでは、1章、2章の対話に基づいた3章の考察がメインとなっている。1章では、11月24日時点のレポートとして、「単一の興味関心批判」として論を展開し、それについて2章でJさんとの対話を行っている。しかし、3章ではテーマはそこから離れ、筆者自身が考える「本当の私」の考察へと関心が移っている。全体としての統一感はないが、考えの変容をそのままレポートに載せたほうが良いと思い、このような体裁をとることにした。

1. 筆者による11月24日のレポート

単一の興味関心批判

この授業も後半に入って、自分のテーマもそろそろ決めなければならなくなった。テーマを適当にでっち上げることもできるだろうが、その「適当にでっち上げる」というところに、どうも私の興味関心があるようだ。私がこの授業で抱いていた疑問は、「なぜ私の興味関心が一つでなければならないのか」ということである。もちろん一つであって悪いはずはない。興味があるものを「興味がある」とはっきり言える人はそれでいい。しかし、私のようにそれがはっきり言えない人は一つの興味関心をでっち上げるしかない。しかし、でっち上げたところで、それはしょせん「でっち上げ」られた興味である。むしろ、私は「単一の興味」を持つこと自体の意味について考えたい。今のところそれが私の興味関心である。

単一の興味関心は何をもたらすのか。それは、「興味関心」と「私」の一対一対関係であ

ろう。単一の「興味関心」は「私」を規定し、「私」は「興味関心」を規定する。つまり、「私」は自分の「興味関心」と向き合うことで、それに「興味関心」を持つ「私」を規定する。そのような一対一対応は、自己を統一性を持った何ものかとして語る場合は、とても役に立つ。そして、それを語るにつれて、「〇〇に興味関心を持つ私」というキャラクターが共同体の認識として生まれる。また、「私」もそのような「私」を引き受けるようになる。そして、その共同体では単一のキャラクターを持った自己が生まれるであろう。それはそれでいいと思う。しかし、一方でそれで終わってはいけないと思う。自己は一度規定されたら固定化されて安定するような何かではなく、常に揺れ動くものである。そのような自己は単一の興味関心の規定からだけでは推し量れないものでもある。私は私でありたいと同時に、何ものでもありたくない。何ものかとして同定されたら、それを乗り越えてさらに違う何ものかでありたい。

一つの興味関心を抱く人間は他の人から見ても、その人が何を持っているのか、なにを大切にしているのかが見えやすい。そこでの立場を元に主張をすれば、その人の考えのようなものが見えやすくなる。同じようなことが、レポートや論文の執筆にも言える。レポートや論文は、研究目的、すなわちリサーチクエスチョンとして立てられた問いに答えることで統一観を示す。そして、そのリサーチクエスチョンも一つの明確な問いとして成立していればいるほど、レポートや論文全体の統一観もより強まる。一つの問いを元に構成されることで、論文やレポートの細部に意味づけがされる。

私はここで「一つの意味づけ」をされることに疑問を覚える。人間にせよ、レポートにせよ、論文にせよ、歴史にせよ、そこには本来多義性が内包されている。そこにそもそも意味などはない。しかし、人間はそれを把持しようとして、認識可能なものに置き換え、意味付けする。しかし、そこで単一の意味づけをすることで、多義性が消されていくのではないだろうか。私はそこに疑問を感じているのである。詳しくは次週のレポートにて。

2. 筆者とJさんとの対話

対話相手 Jさんについて

- ・韓国からの留学生で現在早稲田大学大学院日本語教育研究科の修士2年生
- ・待遇コミュニケーション研究室に所属

なお、対話で話題として登場するHさんも同大学院の修士2年生

発話番号	発話者	発話
		<レポートを読んで、Jさんの考え>

1	J	私と興味関心は一つに結びつくものでは、この授業(※「考えるための日本語」)ではそうではない気がする。自分で言うのは、ここに書いてあるように、多義性って言うか、わかんないじゃん。それを捉えるための一つの観点が、興味関心である、だからその観点からみて、私が一番興味関心がるもの、いちばん自分と近いものという設定で興味関心を見つけて、その観点から自分の過去現在未来を振り返ってみようっていう考えかな、っておもったんだけど、だからその興味関心で言うのが、一つじゃなくてもいいし、ぼくだったら日本語って最初書いたんだけど、そもそも日本語じゃなくてもいい気がしてきて、他のものから見ても出てくる、結局出てくるのは似てる答えな気がするんだ。だから一対一じゃない気がするんだ。
2	筆者	でも、なんで一つの興味関心を・・・
3	J	だからなんか、いった通り、多義性、いっぱいあるから、それを捉えようとしてたら、ある視点が必要、いっぱいあるから、それを、ああ、いっぱいあるねじゃなくて、ある視点から見ることで、なんていうかな、把握しやすくなる。
4	筆者	多義性があるから把握しやすくなるけど、でも、そうやって決めて、一つの視点から見えたら、自分でいうのはこういうものだっていう形がある程度決まってしまうのでは。
5	J	うーん。形っていうものが決まってしまう・・・
6	筆者	決まっちゃって、そういう風に語られた自己ってものが、ほんとに自分だっただけなの？
7	J	うーん。なんていうかな。その、自分、興味関心っていうのが、そもそも、自分の外にあるのではなくて、自分の中にあるものだから、そういう興味関心から自分を捉えた時、きまった形づくりじゃなくて、自分が見えるんじゃないかな。
8	筆者	中にあるって言っても、言葉で外に出すんでしょ。言葉で外に出して、自分はこれこれこういう興味を持っていて、これこれこういう人間です、みたいなことを話していくわけじゃん。
9	J	だからこの授業では、たとえば、ぼくは日本語だったんだけど、日本語っていうものから、私の過去現在未来を考えてみた時、こういう日本語が四段階あって、他の人たちからの影響で、できてますよっていうのが把握できたんだけど。でも、まえ、Hさんと話してた時、それだけじゃないって、ずっとなんか問われて、本当にいいことって言うのは何なのって、ずっと言ってた中で、ほんとにぼくの興味関心っていうのが、日本語じゃなくて、そういう他者っていうものを、意味っていうか、なんていうかな、簡単に言うと、他者っていうのは重要だっただけっていうのが、私の興味関心？で、そこから考えると、ぼくの言語観とか、ぼくがなぜ待遇コミュニケーションをやっているのかとか、そういうのがすべて説明できるようになる。
10	筆者	うーん、他者が重要だなんていう、そのレベルの話ならだれにでも言えることだよな。
11	J	うーん。でも言っただけじゃないじゃん。ぼくは、それがぼくの言語観とか、教育観とか、全てに入ってる。だから、他者が重要ですよって、言って終わりじゃなくて、それがぼくの人生観って言うか、ぼくの中にしみ込んでる。
12	筆者	しみ込んでると言うよりは、その言葉を使えば、自分がやってきたことが説明できるっていう、一つのなんか、フレーズでしょ。

13	J	あー、どっちが先かわからないんだけど、だから、ぼくがやったのが、他者が大事っていうのを認識してから、そういう待遇コミュニケーション観とか、言語観が出てきたか、そういうものができてから、それを振り返ってみたら、結局は他者が重要って言うことが、導き出されたのかわかんないんだけど、でも一応、繋がるじゃん、細川先生が言った、一本の線につながるっていうもの、だから、過去現在未来が一本につながるってものが、できるんじゃないかな。
14	筆者	でも、そんなこと言ったらさ、なんかそういう、大きいくりの言葉を一つポンと並べとけばさ、誰だって、誰の人生だって、簡単につながる事ができる事ができる。ぼくの人生だって、他者が重要って言うてみたら、簡単につながるしさ。
15	J	だからそれを、だから、他者が重要っていうのが、なんていうかな、それが先じゃなくて、自分の中に、興味関心？最初は、小さいきっかけとして、日本語っていう興味関心から、自分の中、自分を振り返ってみることで、導き出された答えでしょ。ぼくの中から、出てきた答え、で、だからなんか、ふつうに外にある、他者は重要ですよ、を持ってきて、自分をやるんじゃないくて、自分の中を、ずーっとやることによって、出てきた言葉が、他者の重要性ってものを...
16	筆者	ほんとに自分の中から出てきたの？(笑)
17	J	ほんとだよ、ほんとだよ。(笑)だから、それは、同じ言葉でも、意味が違うって言うか、うーん、ぼくはそう思うんだけど、もちろん他者が重要ですよっていうのは、誰でも言えると思うんだけど、それを言うことと、自分の中の、ここで言う興味関心っていうのは、一つのきっかけとして、きっかけにすぎない、だから自分のなかでずーっと考えて、なんか掘り下げて下げて下げてみて、出てきたのが、他者の重要性っていうか、それとは重みが違う、同じ言葉でも、だから、まさに自分の言葉かどうかっていうものじゃない？リアリティーっていうか、それはどうか分かんないんだけど、自分のなかで、自分の人生観、言語観、教育観を全部貫くものが、他者の重要性ってものと、ただ他の人が重要って言うてるから、そういうことを言えばいいみたいな、他者が重要ですよって言うてるのとは、全然違うものじゃない。
18	筆者	うーん。でもさ、ありきたりな言葉であっても、自分の経験とくっつけたら、それは...
19	J	だから、くっつけるんじゃないくて、自分の中から出てきた結論が、ありふれた言葉になってるんだけど、それが他者が重要ってことじゃなくても、自分の中から出てきたも、の意味をふつうのみんなが言っている、なんか、意味とは全然違う、同じ言葉でも、全然違う意味だからね。
20	筆者	全然違うのか？
21	J	全然違うよー、なに言ってるの。だからぼくはこの授業で、興味関心、興味関心って言うてるのは、なんか一つの視点にすぎない、だから、私と興味関心が対一みたいに結びつくものじゃなくて、その興味関心を通して、自分ていうものを、掘り下げて掘り下げてみる、ことで...

＜筆者の考え＞		
22	J	じゃあ今細川先生の授業で、一つの興味関心、から、自分を掘り下げるってことについてはどう…
23	筆者	んー、別に、まあ、やって、面白い人にとっては面白いだろうし、いろんなこと話せるかもしれないよね、今まであんまり話したことないような、興味関心と、それを新しい人に向けて話すってことが、できるのであれば楽しいかもしれないけど、でも、そもそも、いつも同じようなことを興味関心を持っていて、たとえば、サッカーが好きというようなアイデンティティーが揺らがないで、いつも同じようなことを相手に話している、その定型文みたいなものが自分の中にあるって、それだって別に、その人にとっては疑いようのないその人にとっては真実かもしれないけど、それを話すことで、話して、いつもと同じような反応が返ってきたとしたら、それは別に何の意味もないよね。
24	J	それっていうのは、たとえばサッカーって言った場合、サッカーが興味関心で終わってるからじゃない？
25	J	だから、なぜサッカーが好きになくなったのか、という掘り下げなきゃ、だからその興味関心っていうのは、ただの、観点にすぎないのに、それが話す内容のすべてみたいなことになってるから
26	筆者	でもさ、なぜそれが好きなのっていうことで、掘り下げられるのは、私がこれこれこういう人間で、こうだったんだ、ってそれがなぜなのって言ったら、これこれこういう人間でこうだったんだ、っていう私についての語りを積み重ねていくことでしょ？で、それで私ができるっていう構造でしょ？そのなぜって問うことが何なのかってことをさ、考えていかないと、なぜって問うことだけが神秘化されてしまって、「なに」とか「どう」とかじゃなくて、なぜだけが正しいんだみたいになっちゃうと、それはそれでまた一つの神秘が生まれちゃうだけでさ、何の解決にもならない。
27	J	うーん、どうなんだろうね、なぜ「なぜ」と問うの…
28	筆者	なぜと問うことが何なのか。「なぜ」と問われたところでどうってことない人だっていっぱいいるだろうし、ちゃんと説明のうまい人とかさ。だって、口のうまい人なんて、自分のアイデンティティーなんて何にも揺らがない、どこでもやりぬくことなんて、余裕でできるでしょ国会答弁みたいなもんだよ、そこで定型文さえあればとか、「なぜ」という問いの形そのものが神秘的なものであるわけではなくて、「なぜ」って問うことで何がしたいのか
29	J	「なぜ」なんだろうね。意味がないわけではないと思うんだけど、どうしてかという、ぼくが、なぜなぜなぜと問われて、一応気づいたもの、あるからね、それは元々自分の中にあるものなんだけど、それを意識してないものが、なぜなぜっていうことで、意識するようになったってことは、けっこう意義、意味があることだと思うんだけど。

30	筆者	うん、でもさ、「なぜ」を問うってことは、理由を答えるってことでしょ、why と because、なぜあなたがそれを選んだのか、あなたの判断は何だったのかということ言葉をよって語らせるってことでしょ、そこで、私の判断がこうだったってことを言葉で示すことよって、私っていう人はこういう判断をする人間なんだってことを、どんどん言葉よって積み重ねていくことじゃん、それがほんとにその時にした判断かどうかってことは問題じゃなくて、私がそこでこういう判断をした人間なんだって言うことよって、私っていう人間がどんどん積み重なっていく、でも、その積み重なって話していった人間てものを、なぜって問われることよって神秘化することよって、なぜって問われて答えたからとって私ってものがそれに一致するのかどうかとて言われたら、それはそれでまた、別の問題じゃない？
31	J	でもそれが、自分のすべてではないんだけど、それを問うことで・・・
32	筆者	まあ、それは意味があるっちゃ意味があるよ、自分が今までそういうことを話さなかったのであれば、自分がこういう判断をしてきた人間なんだっていう言葉でどんどん積み重ねていって、像がどんどん出来上がる、それは今までなかった新しい像かもしれないし。
33	J	でも、逆に、今問われて考えることで、今振り返って、過去を考えることじゃん、そうすると、後付けみたいになってきちゃう可能性はあるね、うーん、どっちなんだろうね、昔そうだったから今の自分がいるか、今の自分から過去を見て、昔こういうことがあったからこういう風になったんだ、っていう意味づけ？まさに意図？意図がコミュニケーションする時にあるか、した後にあるかっていうのと同じかな？今細川先生の授業で語ることが、自分の一部かもしれないんだけど、自分とは言えないね、これが自分のすべてですとか、とは言えない、ことは確かだな。
34	筆者	そうやって自分を語ることで、自分の像みたいなものができてきて、そう見られることで自分が安心するってことはあるよね、そこで語っていった自分、他の人から見られている自分っていうものがあって、そういうものができていくこと、それがコミュニティーなんだっていう、そういうことも言えるよね、だから別にそれは悪くはないけど・・・ぼくが何を批判したかったのかという、何だろう？（笑）
35	筆者	でもそれが、本当の私とか、君が本当にやりたかったことだとか、そういう方向に向かっていくのが、なんか胡散臭いってうか。
36	J	あー、ぼくもHさんに言った、対話するときね、本当に言いたいことはそれじゃないみたい、なんか感じるんだとか、私が言いたいことはそれじゃない気がするとか、言ってるんだよ、お前がなんでわかるのっていうことだよ。（笑）

3. 考察

3. 1 「批判」について

この章を書いている現時点で、前回のレポートと対話を読み返してみると、いろいろとおかしな点に気がつく。1章のレポートでは、「単一の興味関心批判」とタイトルをつけているが、そもそも私は何を「批判」したかったのか。そして、「批判」とは何なのか。それをまず考えてみたい。

筆者にとって「批判」とは対象を非難することではなく、対象を吟味することである。1章のレポートでは、「私がこの授業で抱いていた疑問は、「なぜ私の興味関心が一つでなければならないのか」ということである」と書いているが、対話を終えた今読み返してみると、この「批判」は、この「考えるための日本語」の授業に対する「批判」として機能していない。Jさんとの対話でわかるように、この授業で目指されている自己は、「一度規定されたら固定化されて安定するような何か」（1章のレポートより）ではなく、この授業の中で語る興味関心としての「一つの観点」（2章のJさんの発話（1））によって示される一つの自己に過ぎない。それが見えなくなったために、対話の（34）で筆者は自分が何を批判したかったのかわからなくなっている。（35）の発話で言っているように、筆者が批判したかったのは「本当の私」という自己のあり方である。しかし、それは「考えるための日本語」で目指されている自己とは関係がない。おそらくそれは筆者自身の問題であるはずだ。

3. 2 「本当の私」について

過去現在未来をつなぐ筆者の興味関心が、「本当の私」という自己のありようについてであるということは確かであるような気がする。よくよく考えれば、私の興味関心はこの10年間ぐらい常にそのような問いから離れていない。

筆者が早稲田大学教育学部国語国文学科の卒業論文で扱ったテーマは、埴谷雄高の『死霊』という文学作品であった。この作品は難解な小説だと評されることが多いが、全体を貫くテーマは単純だと思う。それは、小説の主人公が抱く「自同律の不快」という概念である。「自同律の不快」とは、「私は私である」ということへの不快という感覚のことである。この概念は、筆者の考えでは、自己を何者かとして規定することへの不快や疑いから発生する。しかし、この「自同律の不快」は、「自己が何者でもない」「私は私ではない」と言って解消できるものではない。人間は常にいつも「私は私」でありたいのである。しかし、それを言ったとたんにその言葉は「私」からすり抜けていき、決して「私」を表すことはない。「本当の私」という言葉と対応させると、人は「本当の私」に常になりたいが、「これが私だ」と言ったとたんに、それは語りすぎるか語り足りないかどちらかになる。

埴谷雄高がこの問題を解決するために出した概念は「虚体」という概念である。「虚体」は「私が私でないものになる」というように小説では表現されている。小説は常にこの「虚体」を求めながら話が進むが、結局埴谷の死により小説は未完に終わる。「虚体」に対する

筆者の解釈は、おそらく埴谷が考えたこととは関係ないがここで述べておく。

「私が私でないものになる」とはどういうことだろうか。普通の意味で考えるとこれは矛盾でしかない。しかし、「私」を言葉として捉えればどうだろうか。「私」は「私」という言語的存在だが、その解消は「私」という言葉の解消として現れる。つまり、「私」という言葉によって「私」を表す必要がなくなったときに、それは解消される。それは、「私」について様々な言葉で徹底的に追求する形而上学の解消でもある。そのような言語から開放されたときに、「私が私でないものになる」のだと筆者は考えた。つまり、「私が私になる」ということは、「私」という言葉が消滅したところでしかない。

3. 3 日本語教育における「私」

筆者は卒論でそのように考えてから、「私」という形而上学について考え、言葉で語ることはこれきりにしてやめようと思った。なぜなら、筆者がいくらそのようなことを考えても、それで筆者の「私」が満たされるわけではなく、「私」に関する問いを放棄することが真に「私になることだ」ということが、この問いの結論であったからだ。しかし、いま日本語教育の文脈で、筆者は改めて「私」に直面している。

おそらく、日本語教育の文脈で語られる「私」は、卒論で筆者が考えていた「本当の私」とは本質的には無縁である。日本語教育での「私」は、おそらく J さんが言うように、あるひとつの「観点」のようなものに過ぎない。そこでの自己はあるコミュニティーでの他者とのインターアクションに必要な自分の像に過ぎない。それは他者とのインターアクションに必要な「私」のキャラと言ってもいいだろう。しかし、それは「本当の私」という形而上学に向かうべきではないというのが、筆者の現時点での主張である。

「本当の私」へと問いが向かうことの何が問題なのだろうか。筆者は、「本当の私」を言葉によって深く問うている人、いわゆる哲学者のような人を、普遍的な上位者として見出すようなイデオロギー的思考を批判する。

「本当の私」という観点から自己について深く隅々まで内省することとは、自分の過去を隅々まで振り返ることで現在の自分に意味づけをし、さらに未来の自分の像を描くことである。それができたかどうかは、嘘いつわりのない自己をどれだけ言葉で表せたかという点で評価するほかない。「私」自らがそれを評価しようしても、言葉は常に自己を満足に語りつくすことができない。「自同律の不快」の概念でみてきたように、「私」は「私」のすべてを常に表現したいが、「私」が「私」のすべてを言語という記号で象徴的に表現することはできないのである。それは常に「話し足りないか、話しすぎる」(ジジェク, 2000) ものなのである。

他者からの評価はどうだろうか。その人が「本当の私」をどれだけ表しているかは、その人の言葉によって評価するしかない。その人の言葉がいかに「本当の私」に近付いているかを測る物差しで測るしかない。その物差しは、色々あると思うが、一般的には、この授業のように、「思考の過程」を「自分の言葉」で表現することが一つの物差しになる。そ

して、その言葉がどれだけ「本当の私」という言語ゲームの規則に則った語りをしているかという観点から判断されるだろう。しかし、そのような言語ゲームの規則に則れているかどうかということは、その人の「深さ」や「本質」のような普遍的価値とは関係ない。そのような「本当の私」をめぐるゲームは、時代が変わっても、どこのコミュニティーでも通用する普遍的なものであるはずがない。筆者は、そのような「本当の私」としての自己のあり方を「普遍」として振りかざすことが、ヨーロッパに端を発する近代主義、理知主義の押しつけであると思うのである。

3. 4 筆者が目指す「私」

かくして、筆者は「人間本来のあり方」、「深い自己のあり方」という思考法を「本当の私」と名付けて批判した。しかし、このように批判をした後についてまわる問いは、筆者がどのような「私」を目指し、またどのような世界（他者のあり方）を目指すのかという問いであろう。

筆者はこの最終稿を書くまでこの自らの問いに対し、はっきりした答えが出せずにいた。しかし、今考えると、「本当の私」を否定する筆者にとって、本当の「私」の立場はないのかもしれない。

筆者は、特に貧乏でも裕福でもない首都圏近郊の家庭に育ち、海外のルーツもなく、「移動する子ども」でも何でもなかった。そのような何でもない「私」には、外からやってくる宿命としての自己やアイデンティティーは育たなかった。だからこそ、筆者は「私」の存在の意味が見出せなくなることも多かったし、今でもそのようなことはよくある。それは、恵まれない家庭に育った人や、「移動する子ども」たちに比べればくだらない悩みであったかもしれないが、特に誰にも顧みられることのない「何でもない人」の悩みのようなものであった。

筆者は今ではそれなりに自己を作ってきたつもりではあるが、自分の主張にいまだに根がはっていないようにも感じる。筆者のような人の主張は、自分のぬぐい去りがたい宿命から出る言葉ではないので、常に軽い。しかし、いつも根をはずし揺れる姿勢を自分ではそれほど悪いとも思っていないのも確かである。その軽さの中に「私」があるとは言えないが、そのようにしか生きられないのであれば、少なくともそれを肯定的にとらえたいと思う。

筆者は日本語教師として二度ベトナムのハノイで生活をしてきた。そこで会った人びとの暮らしは、筆者に大きな影響を与えている。会社で雇っていた住み込みのお手伝いの女の子と親しくする機会があった。その子は、ベトナム語の識字もできなかったが、それでも日々を楽しそうに暮らしていた。その子にも、家族や恋愛の悩みなどはあったが、もちろん筆者のように哲学的に苦悩するための言葉など持っていなかった。

筆者にとってのベトナムとはそんな場所であった。帰国してから、開高健の『ベトナム戦記』など、ベトナム戦争の本を読みあさったが、そこには思想もなにもなく、生きて、

死んでいく人々の姿が描かれていた。筆者はそのような、自分の死についてさえ「考えない」（ように見える）人たちの姿に衝撃を受け、そのような生き方に惹かれた。

しかし、そうではあるが、たぶん筆者がそのような人に本当に会ったら、「考える」ことを勧めるかもしれない。そして、逆に、徹底的に「考える」人に会ったら、今回のレポートのように「考えない」ことを勧めるかもしれない。やはり筆者は根なし草のようである。

筆者にとっては、「考えること」も「考えないこと」もそれ自体は価値ではない。筆者にとっては、「私」も「他者」も幸せに生きることが重要なのである。そのためには筆者はすべての人間同士の対等なコミュニケーションが必要だと思っている。そのような対等な関係が築けるように、筆者は動きながら世界の批判を続けていきたい。

4. おわりに

この授業では、クラスの人たちとレポートを読みあって対話をし、自分の考えを深めることが求められていたと思う。しかし、筆者の場合はもちろんグループの仲間をはじめクラスの人たちのレポートに影響はされたものの、細川先生の影響が大きかったと思う。実践を受講していたわけではないので直接先生から何かコメントをいただいたわけではないが、レポートを書くときには先生が読まれていることを意識して、わざと反抗してみたり、やりすぎたと思ったら反省してみたりしていたような気がする。どうも筆者は子どもっぽい。このような態度ではとても自律的な「市民」にはなれそうにない。

筆者は「ことばの市民」における「市民」について、古代アテネの市民社会のように市民が直接的に議会で政治的決定をするようなコミュニティーのイメージを持っている。そのようなコミュニティーができるには、その構成員である市民が自立した個人として、そのコミュニティーにおける決定の責任を負わなければならない。自ら決定し、自ら責任を負う、そのような個人になれていること。それがこのコミュニティーにおける市民の資格であろう。

今学期、主にグループの人とだが、クラスでディスカッションを重ね、メンバー一人一人の像が言葉によって出来上がっていった。そのような仲間たちのキャラクターを認識して、感情が揺れ動いたことは、他者との関係を構築できたということであると思う。言葉によって他者とつながることで、人はみな「ことばの市民」になるのだと筆者は考える。

参考文献

スラヴォイ・ジジェク(2000) 『イデオロギーの崇高な対象』河出書房

以上